

都が平安京に移った後は、摂津の国の役所（国衙）が置かれたり、西日本の水上交通を支配した渡辺党の拠点となったりしました。

台地の上にこの時期の遺構が見つかっていないことから、平安から室町時代にかけて盛んだった熊野詣の上陸地として知られる渡辺津は台地の西側にあったといわれています。

渡辺一族が管理していたとされる皇室領の「大江御厨」や源氏物語に出てくる「大江殿」が「大江」の由来と考えられます。

戦国の世には、台地の北西端に樓の岸砦が築かれ攻防の拠点となります。

源氏物語・・・「大江殿と言ひける所は、いたう荒れて、松ばかりぞしるしなる。」

枕草子・・・「勢多の橋。木曾路の橋。堀江の橋。鵲の橋。」

後鳥羽院熊野御幸記・・・「申始許着クホ津先約拜王子人々前後會合、良久御舩着御奉幣御拜二度、先達部々退出、以後御經供養、里神樂了、上下亂舞宿老人々己前退出、」

平家物語・・・「九郎大夫判官義経、都をたて、摂津国渡辺よりふなぞろへして」

北野殿熊野詣日記・・・「入あひのかねのおはりに、わたなへの岸に御着あり、いまたあかゝりせは、かのおほへのきしもみまほしく、伊駒山も雲井のいつくなるらんとおもふへきに、あやなく暮はてぬるそ、うたてしく侍る、舟津に守護の物とも、松明ほしのことくともしまうけて、まちうけたてまつる、御輿御舟によすれば、みなノゝめされて、王子の御前にまいらせたまふ」

太平記・・・「五百余騎を卒して、渡辺の橋を打渡り、天神の森に陣を取る」

信長公記・・・「九月十三日夜中に手を出し、ろうの岸・川口両所の御取出へ」